# 岩木川河口水戸口の歴史

佐々木幹夫（八戸工業大学）、竹内貴弘（八戸工業大学）

## 1．緒言

岩木川は水源を秋田県境の雁森岳に発し，世界遺産白神山地コア-部を途中の諸支川を集めながら大川とし流れ、岩木山の南東山麓を東流し、弘前から北上して平川や浅瀬石川などの支川と合流し，青森県の西半分側中央、津軽平野の真中を北流し、五所川原、十三湖をへて日本海へと注ぐ一級河川である。流域面積 2,540km$^2$，幹川流路長 102km の規模がある。日本国内においては、流域面積が 24 位、幹川流路長が 75 位の河川である。

岩木川の河口、すなわち十三湖の湖口を現地では水戸口と呼んでいる。水戸口は西からの強風による荒波に負けて閉塞を繰り返してきた。多い時は年に４～５回にも達し、行き所のなくなった十三湖の水が溢れ、岩木川下流および十三湖地域に大きな被害をもたらした。岩木川流域には２つの水害がある。１つは大雨の時の洪水によるもので、他の１つは水戸口閉塞による湛水災害である。岩木川の河口は過去に幾度なく閉塞しており、安定した水戸口河道をもとめ新たな水戸口を開削した。過去の水戸口河道について具体的に河道跡を図に示した文献・資料はなく、この面での研究が求められていた。本研究では歴史的な水戸口河道の位置について調べた結果について述べる。

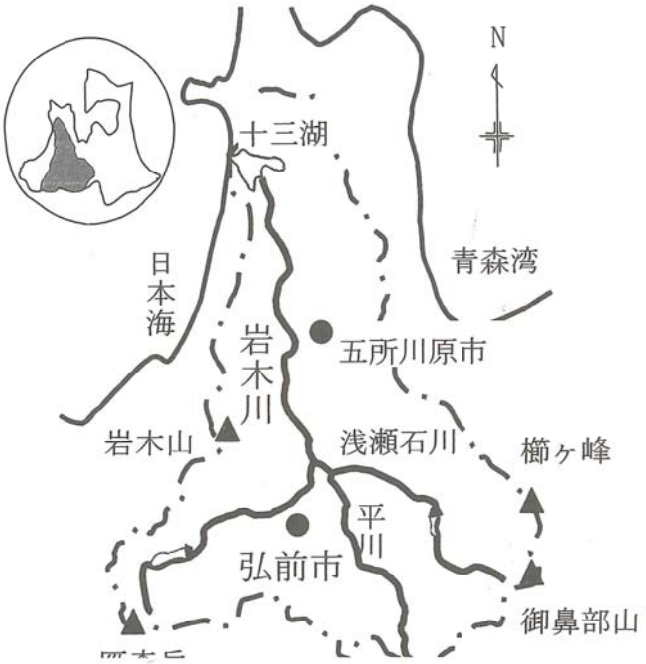


図１．１　岩木川の概要

## 2．水戸口の経過

岩木川の本格的な治水事業は津軽３代藩主信義の時代と云われており、信義は中流の河川改修に着手しただけでなく、新たな水戸口の開削も試みている。1649 年信義は人夫 3,000 人をあて水戸口の切り替え工事を行った。しかし、その水戸口も日本海の荒波には勝てずやがて閉塞に至っている。これが現在わかっている最古の水戸口開削の状況である。その後も多くの水戸口が開かれたがことごとく日本海の荒波に負けてしまい、歴史の中に消えていった。

明治 10 年から 13 年の４ヵ年続いた水戸口の閉塞は、13,000ha に及ぶ浸水被害をもたらし、時の西北津軽郡長工藤行幹らは、岩木川の治水方法を早急にたてるよう、3,000 字に及ぶ請願

---

History of Mitoguchi at River Mouth of Iwaki River
By Mikio SASAKI and Takahiro TAKEUCHI

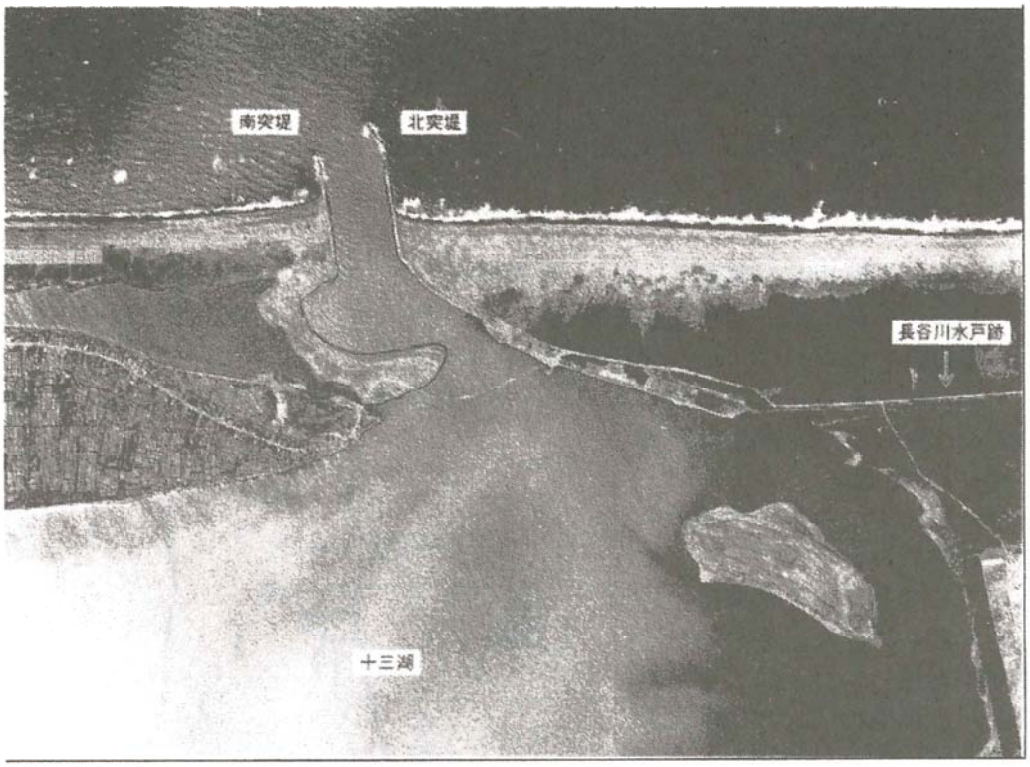


写真２．１　水戸口突堤

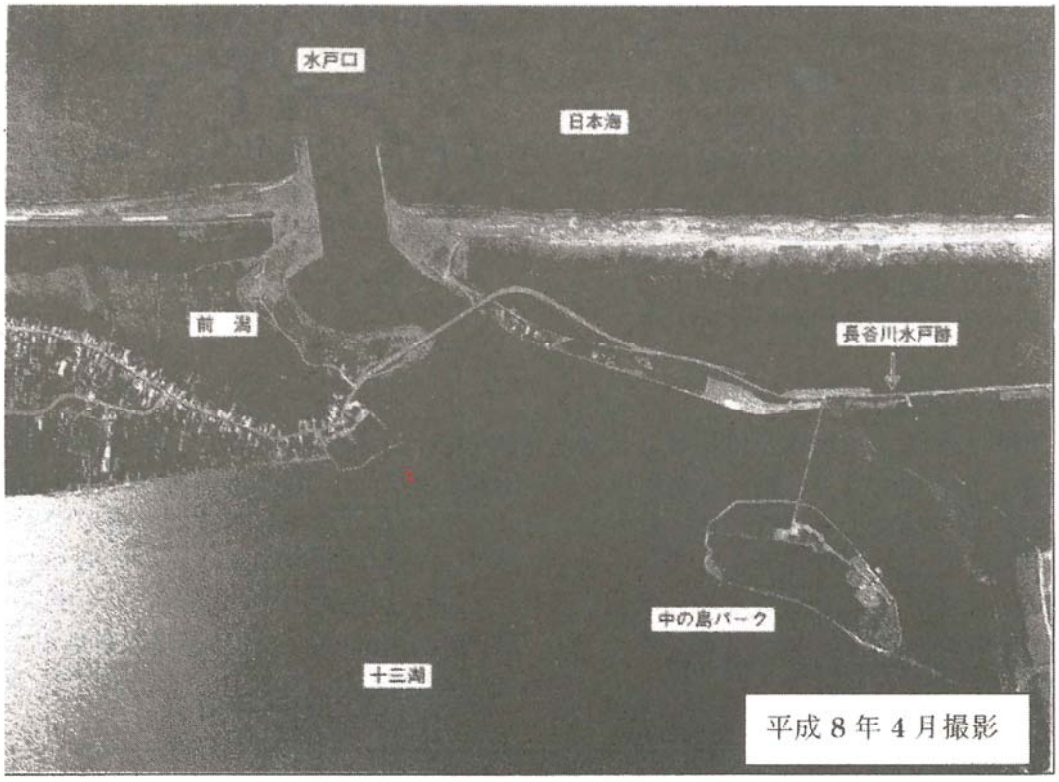


写真２．２　水戸口、旧河道（前潟）跡、長谷川水戸口跡

書を内務省に提出した。内務省は明治 15 年 11 月、御雇技師オランダ人ローエンスト・ムルデンを派遣し、調査にあたらせたが、工事着手に至らず、沿川住民の湛水被害による苦しみは続いた。

大正７年 12 月、内務省は五所川原に改修事務所を設置し、本格的な国による直轄事業が開始された。８年間にわたる水戸口海域の地形変動調査等の実施後、大正 15 年に、陸地から海に突き出した突堤方式として水戸口導流堤の工事が着手された。工事は試験施工として、北側の突堤から始まったが、その経過が良好なことから、昭和３年、本格的な工事に切り替え、昭和５年には南突堤にも着手し、16 年の歳月を経て昭和 21 年に竣工した。完成後もこの水戸口においては閉塞が起きていない。有史上、閉塞のない水戸口は現水戸口だけであり、水戸口導流堤は今日なおその機能を維持しており、今や水戸口突堤（写真２．１）は河口処理に成功した数少ない貴重な河川構造物となっている。近年の水戸口の状況を写真２．２に示した。

表―３．１　水戸口の歴史

| 番号 | 水戸口の名称 | 年 | 位置 |
|---|---|---|---|
| ① | のぶよし<br>信義の水戸口 | 1649 | 明神沼の南端、浜明神の南 |
| ② | かしも<br>川下水戸口 | 1681-1683 | 明神沼の南端 |
| ③ | あみしたかみひゃっけん<br>網下上百間の水戸口 | 1789-1800 | ほぼ現位置と同じ |
| ④ | せばと<br>狭門水戸口 | 1860 | 明神沼と前潟の間、明神沼の北側 |
| ⑤ | じんめいぐうしもはま<br>神明宮下浜水戸口 | 1861-1862 | 神明宮大鳥居前の下の浜 |
| ⑥ | 本田水戸口 | 1863-1866 | 明神沼方面、上潟の南 |
| ⑦ | 本田水戸口北方水戸口 | 1866-1886 | 本田水戸口の少し北側の地点 |
| ⑧ | 長谷川水戸口 | 1869- | 磯松の南端 |
| ⑨ | 旧町奉行所下水戸口 | 1881- | 旧十三町奉行があったとされる位置に開削 |
| ⑩ | 網下水戸口 | 1886 | ほぼ現位置 |
| ⑪ | 神明宮下北方水戸口 | 1890- | 5明神宮下浜水戸口より少し北方の位置 |
| ⑫ | そとめやちわたりばなんぼう<br>五月女萢渡場南方水戸口 | 1897- | 現位置の北側、五月女萢 |
| ⑬ | 御蔵屋敷下水戸口 | 1910-1917 | 旧御蔵屋敷下の砂丘を開削 |
| ⑭ | 羽黒崎対岸水戸口 | 1917- | 現位置のやや南 |
| ⑮ | 岩木川改修水戸口 | 1925- | 現位置（大正15年着工、昭和21年竣工） |

３．歴史水戸口位置図

過去の水戸口を表３.１に示した。これらほとんどの水戸口は長尾左衛門著「岩木川物語」（1965）に詳しく紹介されている。表中①信義の水戸口は著者等が歴史水戸口としてその中に数えいれたものである。前述のように、3 代藩主信義は１６４９年の夏、7 月から９月にかけて新しく水戸口を開削した。記録上、この水戸口が最も南側に位置するのではないか考えられる。②の川下水戸口は明神沼の南端に位置しており、信義の水戸口の北側にあったものと考えられる。③の網下百間の水戸口は現水戸口とほぼ同位置にある。この水戸口では上流新田地方の湛水災害は減少したが、十三湊は船の出入りが不便になったとされている。湛水災害が減ったということは水戸口河道が以前のような数キロに及ぶ長さから１ｋｍ未満の長さになり、短くなったために十三湖の水位が下がり、そのために水戸口閉塞による湛水被害区域が狭まったということを意味しており、船の出入りが不便になったということは、水戸口河道は漂砂により埋没するために浅い河道しかできない

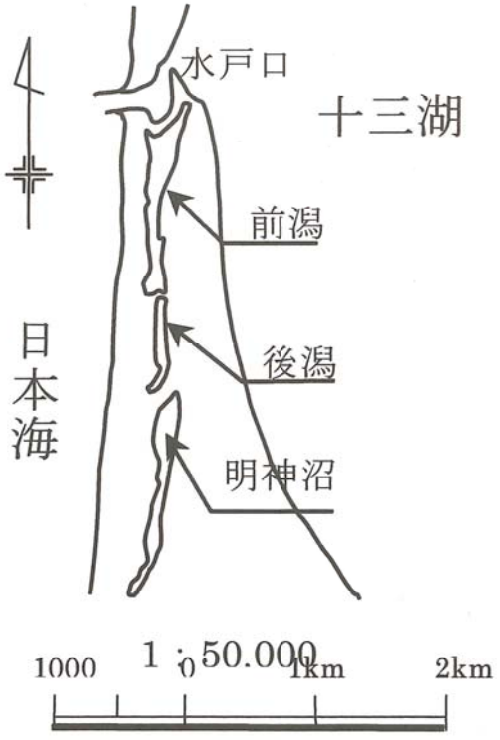


図３．１　旧河道の痕跡

ために船の出入りには不便になったということである。④狭門水戸口明神沼と前潟をつないでいる河道をさしており、水戸口の位置の場所を意味しているものではない。この水戸口は明神沼の北側にあったものと推定される。⑤神明宮下浜水戸口は位置と名前が一致している。神明宮大鳥居前の下の浜に位置していたと解釈される。

⑥本田水戸口は十三奉行本田軍蔵が明神沼付近に開削した水戸口である。明治の初年頃、上流の新田地方から水害があるために北にしてくれとの声が高く埋められたとされる水戸口である。口承では人為的に埋められたことになっているが実際には他の水戸口と同様に日本海の波に負けて閉塞が繰り返されたために使われなくなったものと考えられる。⑦本田水戸口北方水戸口は本田水戸口の北側に造られた水戸口である。⑧長谷川水戸口は現在の木造町にあたる菰槌村長谷川清次郎村長が中心となり新水戸口開

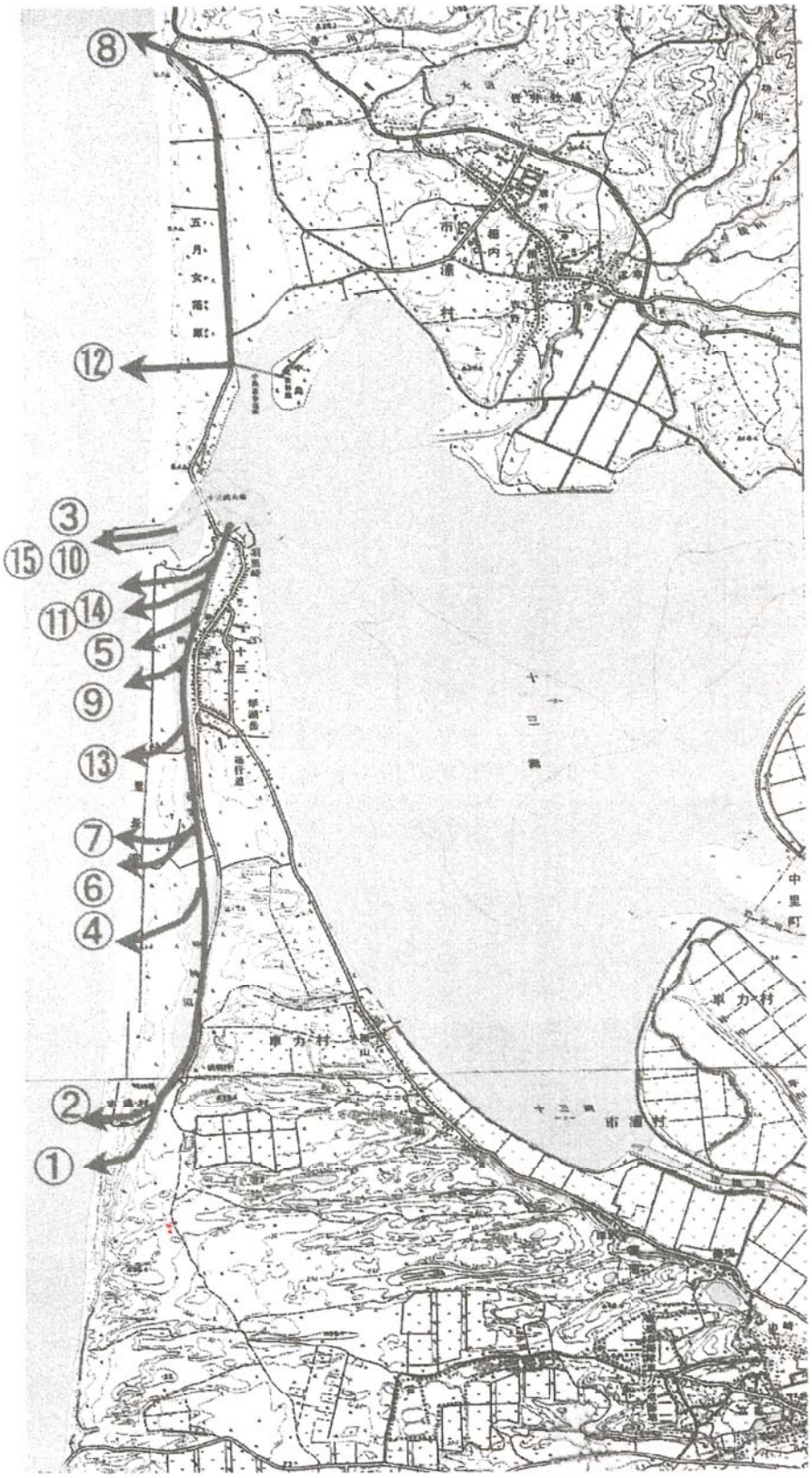


図３．２　歴史水戸口の位置

削を凶作救済事業と兼ねて、藩知事の許可を得て行ったもので、1870年5月から11月までの7ヶ月間で新河道の開削を行ったものである。計画どおりの通水量は得られずに閉塞してしまっている。⑨の旧町奉行所下水戸口は十三村民が勝手に開削したもので、閉塞により上流数10ヶ村の耕地が水没するようになった。

⑩の網下水戸口は県が開削したもので、十三村民は航路の吃水深が不足するので喜ぶことはなかった。⑪の神明宮下北方水戸口の閉塞では大規模な水戸破り事件が発生し、流血の惨事を起した水戸口である（明治23年1月）。この騒動の結果、県が開削位置を決めたのが⑫の五月女萢渡場南方水戸口である。⑬御蔵屋敷下水戸口は明治の末期に、旧御蔵屋敷の下の砂丘に掘られた水戸口である。⑭羽黒崎対岸水戸口は現水戸口のやや南に位置しており、毎年閉塞する度に上流方面の村民が開削のために出動して十三村の村民と摩擦が生じていた。

表-7.1に示した①～⑭の水戸口は全て閉塞している。過去のほとんどの水戸口は南側に開削されている。北西からの波により河口が南に偏ることと、南側ほど舟運に便利だからだと考えられる。現水戸口より南側には、図3．1に示すように前潟、後潟、明神沼などの旧河道の跡が今でも見ることができる。これまでの水戸口の位置を推定した結果を図3．2に示した。

## 4．むすび

記録では現水戸口を含め17の水戸口が確認される。そのうち15の水戸口の位置を図に示してみた。これまでにどの位置に水戸口があったかを記述した文献や資料は認められるが位置を図に示したものはなかった。これは、水戸口の名称そのものが位置を示しているものと水戸口位置には関係ない名称の水戸口があったことも原因しているものと考えられる。今後は今回示した歴史的な水戸口の位置を再度確認しながら、残された水戸口の位置を調査する必要がある。

### 参考文献

1）近藤俶朗（1972）：　感潮俠水路の流速，内水位および最大流速水深の一解法，土木学会論文報告書，第206号，pp.49～54.

2）佐々木幹夫・沼尾康男・田中　仁・首藤伸夫（1989）：　岩木川水戸口の水理特性,昭和63年度土木学会東北支部技術研究発表会公演概要,pp.62～63.

3）東北大学工学部土木部土木教室（1965）：　岩木川河口水理調査報告書,pp.20.

4）内務省岩木川改修事務所（1918～1939）：　十三水戸口変形図780p.（青森工事事務所保管）

5）中村　充・白石英彦・佐々木康夫（1965）：　海水交流の一解析法,第12回海岸工学講演会論文集,pp.128～132.

6）長尾角左衛門（1965）：岩木川物語、建設省東北地方建設局青森工事事務所発行（1998）「津軽平野と岩木川のあゆみ」資料1